

生活文化の聞き取り調査、及び、仰木ふるさとカルタ制作 中編

永江 弘之・大原 歩

生活文化の聞き取り調査、及び、仰木ふるさとカルタ制作 中編

Title :

An Interview-Based Fact-Finding Survey of the Life and Culture of Ogi and the Making of Karuta (picture cards for a traditional Japanese game) Featuring the Omi Countryside: Part Two

Summary :

Ogi, Otsu, Shiga Prefecture, a rural farming area set in the lush countryside, has a history that goes back over 1,000 years. I carried out an interview-based fact-finding survey of the life and culture of Ogi, speaking with people between 60 and 90 years of age who live in the area. Based on the data collected I produced the “Ogi Furusato Karuta” (Ogi Countryside Cards). Here, in Part Two of this paper, I will explain the later stages of the process of designing the cards.

第一章 はじめに

※(第三章 三二五三／大原担当)

永江 弘之・大原 歩

本研究のフィールド、滋賀県大津市仰木は、西は比叡山を背に、東は琵琶湖を見下ろす山麓に位置し、上仰木、辻ヶ下、平尾、下仰木の四つの字からなる大きな農村集落である。集落を階段状の棚田が取り巻き、背後に雑木林や山林が続く里山は、日本の原風景とも呼べる景観を今も残している(図1)。平安期から「仰木庄」として知られ、氏神の小椋神社は延長五年(九二七)に『延喜式』の式内社に選ばれており、千年以上の歴史がある集落である。

仰木地域は、固有の豊かな文化資源を脈々と今に伝えている。棚田・里山をはじめ、歴史、伝承、祭り、信仰、交流、生活様式、民俗、風習、道具、自然といったものが融合して、「仰木の暮らし」をかたちづくっている。

一方で、圃場整備や開発によって里山の姿は大きく変わりつつあり、高齢化などの現代的課題の深刻化とともに仰木も今、急激な変化の中にあることは否めない。それでも現在の仰木にはなお、かつての日本の里山に息づいていた心惹かれる魅力が

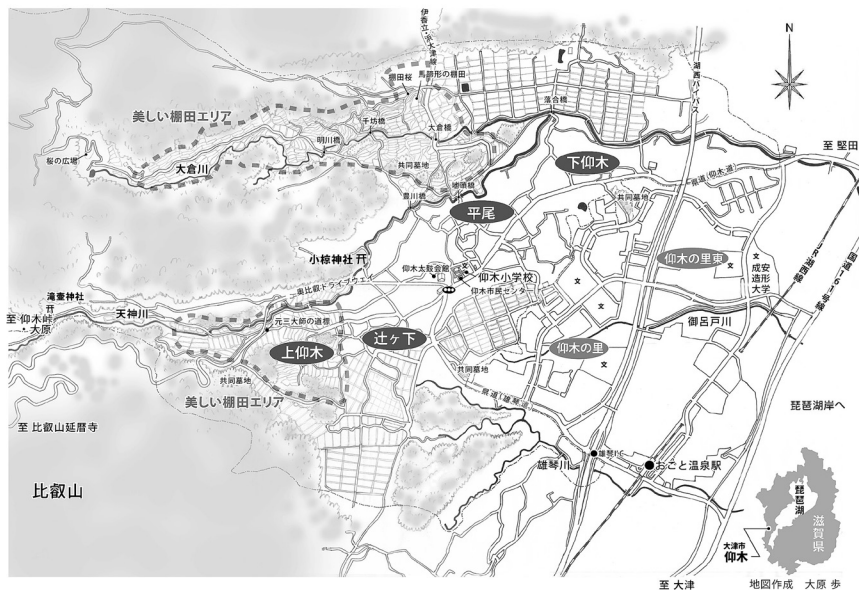


図1：仰木全体地図

滋賀県大津市仰木：大津市北部、比叡山から琵琶湖の西岸へと伸びる雄大な山麓の中間に位置する仰木は、階段状の棚田が取り巻く、世帯数801戸、人口2335人（平成25年4月1日現在）、4つの字（上仰木・辻ヶ下・平尾・下仰木）から成る農村集落。仰木の集落形成の歴史は1150年前に遡ると言われ、大津と北陸を結ぶ西近江路（国道161号線）から西へ分岐し、京都の大原で若狭街道、いわゆる鯖街道と合流する仰木道の途中に発達した。集落には、小椋神社を筆頭とする多数の社寺、無数の地蔵や祠、共同墓場が点在し、東塔、西塔と並ぶ比叡山三塔のひとつ、横川への登り口に当たる。

たくさん詰まっており、そこには、効率化を優先した現代の都市型社会において失われつつある価値観が生きている。

本研究は、仰木集落の六〇歳以上の方からの聞き取り調査をベースとして、昭和二〇年代～四〇年代の里山の生活文化を目に見える形で共有できる「ふるさとカルタ」としてよみがえらせる試みである。成安造形大学附属近江学研究所で平成二二年度（二〇一〇）から三カ年計画で取り組んだ近江学研究「里山・水と暮らし」の第二期「生活文化の聞き取り調査、及び、仰木ふるさとカルタ制作」として、平成二三年度（二〇一一）、二四年度（二〇一二）に仰木地区で実施した調査・研究活動である。本稿では、中編として「読み札決定から絵札の風景を描くための聞き取り調査」及び「絵札原画の制作と仰木ふるさとカルタの完成」までの成果を報告する。なお、前編の報告は平成二六年三月発行の「成安造形大学附属近江学研究所紀要 第3号」に掲載している。

第二章 調査・研究の目的

本研究では、高度経済成長で「物質的豊かさ」と引き替えに切り捨ててきたさまざまな素材や道具、生活思想、自然観などに目を向け、住民聞き取り調査等を通して人々や集落の記憶・思い出の中に息づく「今は見ることでできない情景」「現代に名残をとどめる情景」「暮らし（生活文化）のかたち」を掘り起こし、仰木固有の風土や文化、暮らしの情景を浮き彫りにして記録すること。および、それらの内にひそむ美しさ、かけがえのなさ、心の豊かさを再発見し、未来につないでいくためのツールとして、記録した言葉や情報をビジュアル化して、世代や地域を超えて多くの人が共有できる「ふるさとカルタ」を制作することを目的とした。

本研究には、大原歩、加藤賢治と私の三名の研究員に加え、成安造形大学学生十二名が研究スタッフとして参画し、一貫して活動した。成果物もさることながら、学生たちが地域と深く関わり、聞き取り調査からカルタ制作までをチームとして担うという形の研究手法の確立を重要視し、本研究における教育効果に期待した。

また、思い出の聞き取りをベースとした手法は、近年、高齢者の認知症の予防として取り組みや研究が広がっている「回想法」と密接に関連している。心理療法のみならず、世代間交流や地域活動などの活性化の効果が指摘されており、語り手であ

るご高齢の方が元気に活動的になれるだけではなく、聞き手である若者の活力や成長にも大きな効果が見られるとのこと。人生経験豊かなおじいちゃん、おばあちゃんと話すことは、本などからの知識よりずっとリアルで心に響くのもかもしれない。そうした意味でも、「ふるさとカルタ」の取り組みが、「過去と現在と未来をつなげる」「世代をつなげる」「地域をつなげる」「いのちをつなげる」、そうした総合的な地域発展につながっていけばと思う。

第三章 仰木ふるさとカルタの制作（読み札決定、

絵札原画の制作、カルタの製品化）

三― 概要

平成二四年（二〇一二）一月から、読み札の選定と並行して、十二名の学生スタッフとともに絵札のアイデアスケッチをスタートした。六月に、四八枚の読み札が決定。七月～九月に、読み札の情景を絵札に描くための聞き取り調査。その後、下絵、着色という手順で原画の制作を進め、平成二五年（二〇一三）二月にすべての原画が完成した。

「絵札」「読み札」に加えて、「仰木の暮らし解説書」、「外箱」などをデザインし、印刷原稿を作成。製品化を進めた。

一連の流れは、次のようなステップとなる。

1. 仰木ふるさとカルタ読み札を決める作業
2. 読み札の情景を絵札に描くための聞き取り調査とアイデアスケッチ
3. 絵札原画の制作
4. 「仰木ふるさとカルタ」の製品化

三二二 仰木ふるさとカルタ読み札を決める作業

三二二― 俳句の会「畦草会」の協力を得て読み札決定へ

「前編 第三章 三二五 カルタ読み札を決めるための聞き取り調査」で報告した通り、「仰木ふるさとマンガラ」を手がかりとして「ふるさとの記憶」を掘り起し、仰木のかつての生活文化を浮き彫りにすることを大切にしながら、読み札候補を絞り込むための聞き取りを進めてきた。聞き取り会の中で「仰木ならではの」「これは外せない」という仰木の方のご意見をお聞きし読み札候補を挙げていき、大学に戻って学生と共に「魅力的な絵になり得るか」を検討して候補を絞っていった。

平成二四年（二〇一二）五月から六月にかけて、研究スタッフが考えた読み札の原案をもとに仰木の俳句の会「畦草会」にご協力をお願いし、一緒に推敲を重ねた。畦草会は、明治終わり頃に発足した歴史ある俳句の会で、仰木の四地区から十名の会員が参加しておられる（当時）。読み札候補の文言を声に出して読み上げ、その情景を思い浮かべながら言葉とリズムを吟味し、方言も残しながら昭和二〇～四〇年代の仰木の生活文化

を表現する読み札を決めていった。（写真1～3）



写真2：畦草会の方々に学生が編集した京都新聞の記事「@キャンパス」をご覧いただく

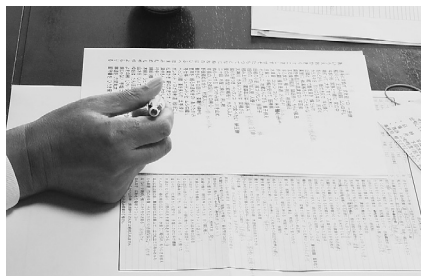


写真3：読み札の案を読み合わせて、赤入れをしながら推敲していく



写真1：仰木の俳句の会「畦草会」の例会で読み札の推敲を依頼

三二二 読み札

い 稲刈って 足踏み脱穀(だっこく) 筵(むしろ)干し

【田畑仕事】

ろ 路肩(ろかた)に積んだ 柴の束(そく) 青年団の 収入

【山仕事】

は 働きのもの 牛の足にも 藁(わら)の沓(くつ)

【生き物】

に 二十段 柿屋に映えし 吊し柿(つるしがき)

【風景】

ほ ボンネットバスが 走る砂利道 砂ぼこり

【風景】

へ へつぱり腰 藁をはさんで 土手すべり

【遊び】

と 隣の餅つき ペッタンポン ひとつ食べたい

【食】

ち 提灯(ちようちん)の灯りで 嫁入見(よめりみ)

【食】

人だから

【冠婚葬祭】

り 林道を 六間丸太(ろっけんまるた) 運ぶ牛

【山仕事】

ぬ ぬるりと 魚つかみに 川を止め

【遊び】

る 留守番を ひたき座で暖とり ウトウトと

【住】

を 怒ると怖い山の神 女は一切 かまいません

【山仕事】

わ 綿繰り機(わたくりき) キューと分けたる 雪あられ

【衣】

か カラスキを 引っぱる牛の 尻叩く

【田畑仕事】

よ よその畑で キュウリやトマトを 盗み食い

【食】

た 田植えの小昼(こびる) 喉(のど)ゴックンと 豆団子

【食】

れ 連綿と 守り育む 孫の代

【結】

そ そこかしこ 地藏さんござる 菓子供え(そなえ)

【冠婚葬祭】

つ 積み上げた 夏の宿題 葉草採り

【学校生活】

ね 年長のひと 夜回り 火の用心

【結】

な 夏の夜 寝間(ねま)に蚊帳(かや)張り ホタル入れ

【住】

ら 楽じゃない 手塩にかけた牛 優勝

【生き物】

む 村中(むらじゅう)に ドテブクドンと 仰木の太鼓

【冠婚葬祭】

う 牛飼うも 家族と一緒に 家(うち)の中

【住】

ゐ いい眺め 横川(よかわ)の木々を 仰ぎ見る

【風景】

の 野良着も似合う 姐(あね)さんかぶり 村美人

【衣】

お おくどさん 飯炊き(めしたき)灰で 芋も焼く

【住】

く 薬屋に もらってうれしい 紙風船

【遊び】

や 山水で コットンコットン 水車が回る

【風景】

ま 松葉かき 薪(たきぎ)の焚きつけ よく燃える

【山仕事】

け 劇、踊り 木造講堂の 学芸会

【学校生活】

ふ 冬仕事 シュートントンと 筵(むしろ)織り

【田畑仕事】

こ 五右衛門風呂 隣近所へ もらい風呂

【住】

え 枝打って 大きく育て 大木に

【山仕事】

て 天神川 ホタルつかみは 葉種がら

【生き物】

あ 赤子(あこ)背負う 厄難(やくなん)よけの 一升餅

【食】

さ 早乙女(さおとめ)の 横一列に 棚田植え 【田畑仕事】
 き 近隣(きんりん)と 結(ゆい)で屋根葺き

煤(すす)だらけ

【結】

ゆ おは 田んぼのいっぶく場

【田畑仕事】

め をそろえ きれいに作る 藁草履

【衣】

み 満仲さん 帰らんといてと 通せんぼ

【冠婚葬祭】

し 時代劇 撮影最適 おらの村

【風景】

ゑ 縁の下 にわとり朝から コケコッコー

【生き物】

ひ 百年を 経る 木造校舎のあたたかみ

【学校生活】

も 木綿糸 シュータンタンと 機(はた)を織る

【衣】

せ 先輩に 手ほどき受けて 笹神輿

【結】

す 相撲取り 大人も子どもも四股(しこ)を踏む

【遊び】

京 京奉公(きようほうこう) 嫁入り修行 垢(あか)抜けて

【冠婚葬祭】

三三三 読み札の情景を絵札に描くための聞き取り調査と

アイデアスケッチ

三三三 記憶を描くことの難しさ

本研究は、「言葉」と「絵」を組み合わせて、かつての仰木の暮らし、里山の暮らしを再現し、世代を越えた人たちの共感を呼び起こす「カルタ」というツールを生み出す取り組みである。子どもから大人までさまざまな世代の人たちが一緒に遊べるカルタの「挿絵(絵札)」という点で、特に「ぬくもりのあ

る絵」と「情景を彷彿とさせる絵(共感できる絵)」に仕上げることを大切にしたい。

「ぬくもり」を伝えるために、すべての絵札に必ず「人」を入れることにした。また、画材はアナログ画材に限定し、色鉛筆や鉛筆による線描きに、水彩絵具やアクリル絵具で着色した。「情景を彷彿とさせる」ためには、読み札の内容をきちんと説明し伝える絵にする必要がある。これはイラストレーションの一番重要な機能である。さらに今回は、単に説明するだけではなく「人の想い」を込めたいと考え、これまでの聞き取りを通して得た「五感に宿る思い出」をできるだけ視覚的に絵に盛り込むことを意識した。そのため、「どんな色の服でしたか?」「着心地はどうでしたか?」「どんな味でしたか?」「どんな匂いでしたか?」「どんな気持ちがありましたか?」など、具体的にその思い出にまつわる「五感体験」や「気持ち」をさらに深く聞き取っていった。

ふるさとカルタの情景を描く難しさは、思い出という「今は見ることのできない情景」を再現することにある。学生スタッフや研究員にとって昭和二〇・四〇年代の情景は、本やテレビなどの間接的なイメージしかない。それらを絵にするためには、仰木の方からの聞き取り(言葉による説明)が最も重要なことは言うまでもないが、それだけでは不十分で、その情景に関する資料集めが必須だった。仰木の方が持つおられる当時の貴重な写真もお借りできた。しかし、今でこそ私たちは何気ない

日常にもカメラを向けるが、当時はカメラを持つ人も少なく、日常の暮らしを写真で記録する人はごく限られていた。仰木に残る写真も、結婚式や学校行事など記念写真的なものが多く、当時の日常の暮らしを今に再現するための多くの資料は、本や写真集、博物館や資料館、インターネットから収集した。また、古い写真はモノクロームなので、色に関する情報は仰木の方から聞き取りしながら色鉛筆で実際に色を塗ってみて確認していった。

今回の聞き取りをもとにした再現制作で最も難しかったのは、一人の人からの聞き取りを絵にするわけではなく、ひとつの読み札の情景を複数の方からの聞き取りで構成していった点である。同級生の人同士のお話は共通のイメージを探りやすいが、聞き取り対象は六〇〜八〇歳代なので、数年〜二〇年余りの開きがある場合もある。また、上仰木、辻ヶ下、平尾、下仰木の四つの地区による違いもある。語り手の年代や居住地域の違いによって、同じ名前の物や出来事について、違う形状、素材、使い方、別の習慣などが語られることがたびたびあった。そうした違いを包含しつつ、原画制作者が絵柄を選択していったため、その絵は自ずと「特定の誰かの思い出」ではなく、「仰木の共通の思い出」という性質のものとなっている。「不確実」をはらみつつ「普遍性」につながる絵になっていると言えるかもしれない。

研究の前半の「読み札を決めるための聞き取り調査」(前編

第三章)はかつての仰木の暮らしの全容をとらえる試みだったが、後半の「絵札を描くための聞き取り調査」はより深くそれぞれの思い出を掘り下げ、五感に残る記憶を呼び起こすことで思い出に生彩を与え、それらの内にひそむ、かけがえのなさ、心の豊かさまで再現する試みになったと思う。

三二二 絵札を描くための聞き取り調査

絵札づくりは、十二名の学生スタッフが一枚〜六枚ずつ担当した(一枚だけ担当した学生は、途中から留学したため)。アイデアスケッチから原画完成までの作画指導は永江が行った。

平成二三年(二〇一一)十二月に、学生スタッフ向けの「絵札づくりガイドンス」を実施し、絵札の分担を決め、フォーマットや制作手順を説明した。

翌一月から、(この時点ではまだ読み札が確定していないため)読み札候補のアイデアスケッチの制作が始まった。絵を描いてみて改めて「知らないこと」に気づく。必要に応じて、読み札に登場する物や出来事、その情景に関する資料集を進めた。仰木の方からも写真をご提供いただいたり、スケッチを描いていたたりしたが、資料の多くは、昔の暮らしを題材とした本、写真集、大津市立仰木小学校民具資料室、琵琶湖博物館の展示や資料、インターネット、現地取材などで収集した。(写真4〜12)

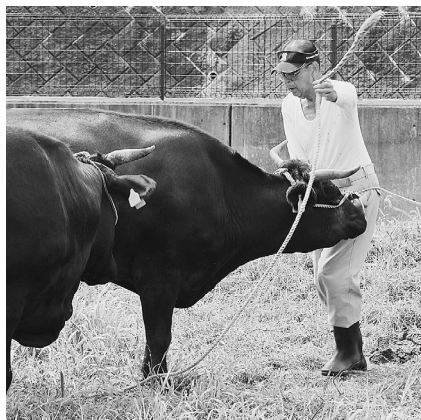


写真7：仰木の牛（下仰木の飯田さんに取材）



写真8：かつてこの坂道沿いに複数の水車小屋があった（上仰木東側斜面にて取材）



写真9：立体迷路のような坂道の向こうに棚田が広がる（上仰木にて取材）



写真4：ふご（仰木小学校の民具資料室にて取材）



写真5：牛のカラスキ（仰木小学校の民具資料室にて取材）

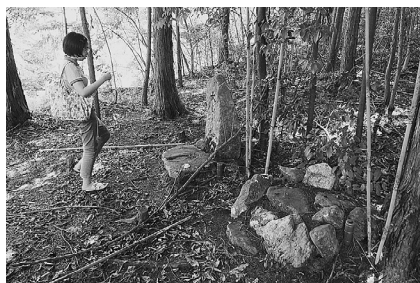


写真6：山の神（上仰木で取材）



写真11：9月23日、上仰木と辻ヶ下の「山行き」の直会（辻ヶ下自治会館にて取材）



写真10：平尾のバス停（平尾にて取材）



写真12：昔のおやつ（山行きの直会、辻ヶ下自治会館にて取材）

直会のテレビ取材にあわせて、仰木の方が昔のおやつを作って振る舞われた。左が「豆団子」、中が「もし」、右が「もしをアレンジして餡を巻いたもの」



写真13：7月30日、上仰木自治会館での聞き取りワークショップ



写真14：7月31日、平尾自治会館での聞き取りワークショップ

読み札が確定した平成二四年（二〇一二）七月以降は、アイデアスケッチから原画の下絵へと、より具体的に絵づくりを進めていった。仰木の方に下絵を見ていただきながら聞き取りをするために、「絵札づくり聞き取りワークショップ」を開催した。七月三〇日に上仰木自治会館にて、翌三十一日に平尾自治会館にて、八月四日に仰木地域全体の夏祭り「仰木ふれあい夏祭り」にて開催し、聞き取り回数を重ねた。夏祭りでは、これまでの研究活動の中間発表の展示を通して老人クラブのみなさん以外の多くの方に活動を知っていただき、たくさんのお話をお聞きすることができた。こうして、かつての暮らしの情景を仰木の方と一緒に検証しながら、再現していった。（写真13～18）



写真15：下絵を見せながら形や色やその時の気持ちなどを確認しメモを取る



写真17：ご持参いただいた古いアルバムを囲み、1枚1枚の写真に話がふくらむ

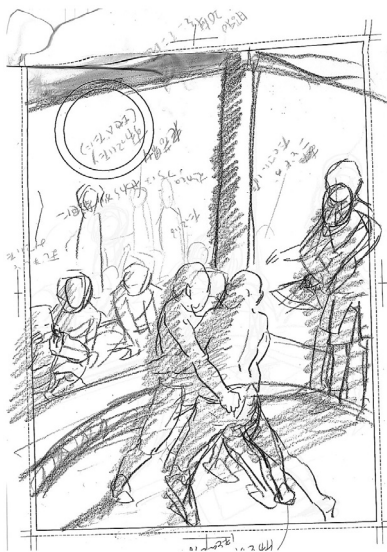


写真18：夏祭りに集まった人たちに下絵やスケッチを見せながらお話を聞く

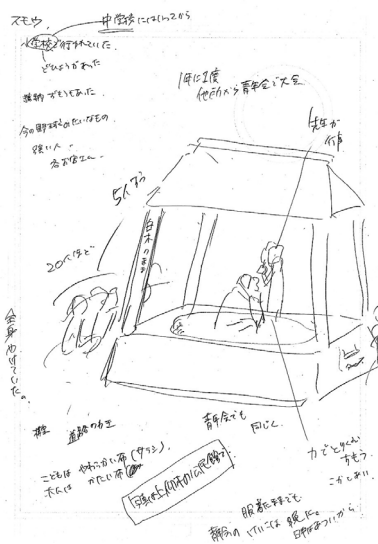


写真16：8月4日、仰木ふれあい夏祭りでの聞き取りワークショップ

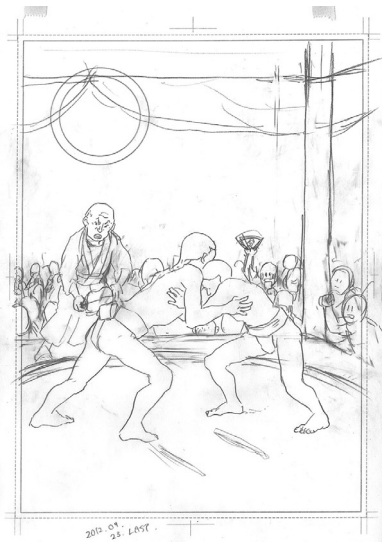
手前は、仰木の方や子どもたちに仰木の絵を描いてもらうコーナー。奥は、絵札制作のための聞き取りをしている。一番奥に、本研究の中間発表の展示物が見える。



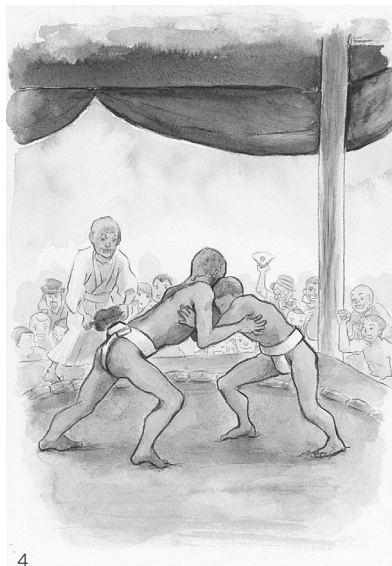
1



2



3



4

図3：下絵の構図を工夫し、聞き取りを経て原画を仕上げていく

- 1 初期のアイデアスケッチ。これを見せながら聞き取りをし、絵に直接メモしていく。
- 2 絵とメモで記録して原画の修正に活かす。
- 3 聞き取りを通して修正した下絵。
- 4 着色して仕上げた絵札原画。



写真22：板に水張りされた状態の完成した絵札原画



写真19：主役と背景のメリハリをつけながら、細部を仕上げていく



写真20：イラストレーション領域の実習室での原画制作



写真21：色鉛筆や水彩絵具などで原画を仕上げていく

三二五 「仰木ふるさとカルタ」の製品化

三二五 一 絵札と読み札の印刷原稿作成と、入稿、色校正
 平成二五年（二〇一三）一月に、印刷を発注するアインズ株式会社の担当者と最終的なカルタの製品仕様を検討した。サイズは、一二〇×八五ミリ。アインズでもカルタの印刷は初めての受注ということで、特にカルタの厚みをどう実現するかが課題となった。希望する厚みの紙には直接印刷することができない。試作の結果、「合紙」という方法で次の1、2、3の紙を貼り合わせて、絵札と読み札を制作することになった。

1、絵札（読み札）の面・・・絵札（読み札）を印刷した

上質紙 重さ九〇kg 厚み〇・一二ミリ

文章を作成した。仰木の方たちの記憶に残る出来事の細部までなるべく具体的に記すことで、記録としての意味も重要視した。また、掛け声、話し言葉、感触や音など、思い出を呼び覚ますような五感に響く言葉を取り入れることで、その出来事を知らない今の世代の人たちにも臨場感を伝えるような文章を心がけた。

2. 形態・レイアウト・文字組について

形態は、A3サイズ（縦四二〇ミリ×横二九七ミリ）を地図折（外四つ折クロス二つ折）にし、同封しやすい形にした。また、カルタと一緒にでなく独立して「仰木のくらし解説」だけを見ても理解できるように、このプロジェクトの内容、仰木地区の紹介、カルタの読み札、絵札、カルタ解説を一覧できるようにレイアウトして掲載した。

カルタ解説は、一段四枚分ずつ配置するよう文字組をし、一段分の文字数にあわせて簡潔に四枚の解説テキストを作成した。文字数は一〇五〜一九五文字となった。

いろは…の題字・読み札・解説文の文字フォント・サイズ・色は、年配の方にも読みやすいように見本を仰木の方やスタッフで何度も確認し設定を決めた。また、このカルタの持つ「次世代に仰木の暮らしを引き継ぐ」というコンセプトをもとに、難しい漢字や固有名詞にはルビを打ち、できるだけ小学生まで理解できるように配慮した。（図4）

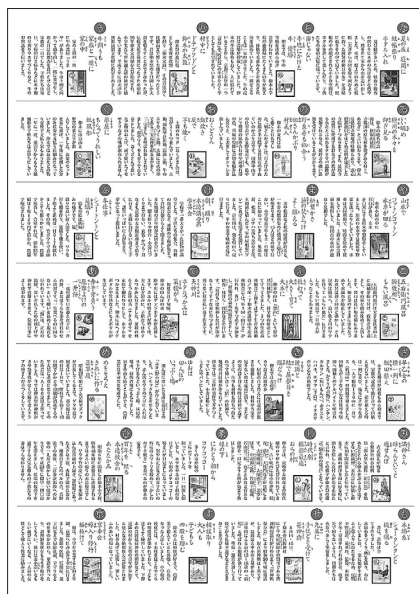
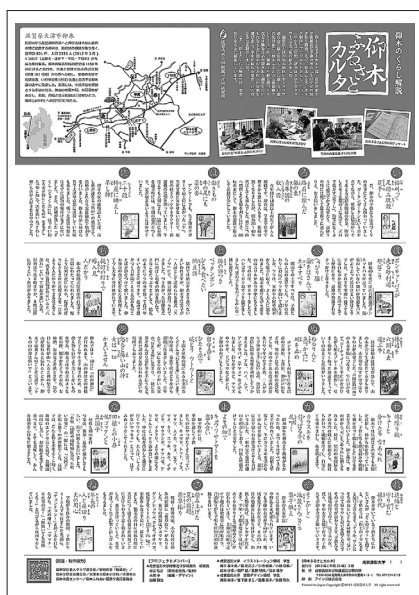


図4：仰木のくらし解説（裏）



仰木のくらし解説（表）



写真24：仰木ふるさとカルタ完成を喜ぶ研究スタッフ
(全員一緒に集まれなかったのが残念)

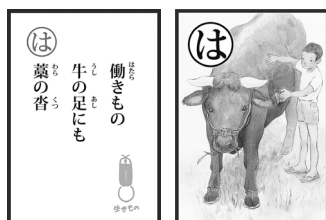
第四章 仰木ふるさとカルタの完成とプレス発表
 四一 仰木ふるさとカルタの完成
 平成二五年(二〇一三)三月二八日、仰木ふるさとカルタの初版三〇〇部が納品された。外箱、絵札、読み札とも、手触りや厚みにあたたかみを感じられ、しっかりと存在感のある仕上がりになった。「仰木のくらし解説」と「ごあいさつ文」をセットし、四月二七日から二八〇〇円(税別)で頒布を開始することとし、プレスリリースを行う。(図5)(写真24)



イラストが見やすい大判サイズ



「仰木のくらし解説」付き



読み札

絵札

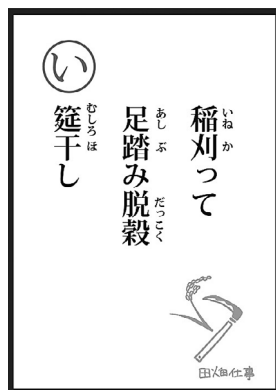
図5：仰木ふるさとカルタ

発行日：2013年(平成25年)3月
 発行：成安造形大学附属近江学研究所
 〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
 TEL 077-574-2118
 印刷：アインズ株式会社
 頒布価格：定価2800円+税

セット内容：・読み札/絵札48枚
 合計96枚
 ・しおり(解説書)
 材質：外箱＝紙、札＝紙
 バックージサイズ：176×125×60mm
 カードサイズ：120×85mm

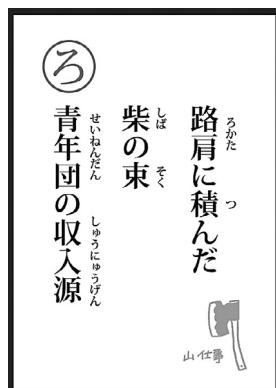
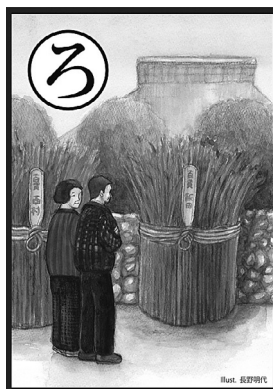
昔、仰木の子供たちは米つくりの仕事にたくさん関わっていました。ガークンガークンという音を立てながら、乾燥した稲藁からモミをとる足踏み脱穀の作業。脱穀したモミを筵の上に広げて、天日で乾かす「筵干し」。均等に乾くように道具でかき混ぜたり、雨降りの時には慌てて筵を軒下に運んだり、お手伝いをしました。

作画 鈴木沙季



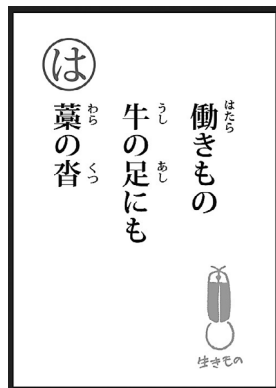
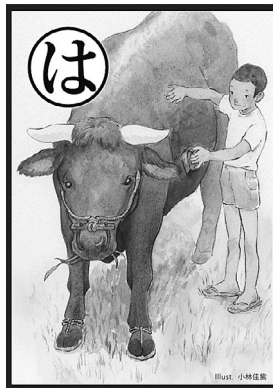
青年団は十八歳以上の男子が入る組織です。現在は、学業や仕事で仰木から離れる人も多く、組織は無くなりましたが、昭和二〇〜四〇年代はとても盛んでした。秋には、山へ燃料となる柴を刈りに行き、八〇キロの束にして、仰木の道路で販売して活動資金にしていました。

作画 長野明代



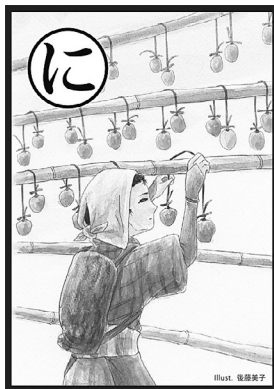
アンケートでも、生き物カテゴリーで最上位にあがった「牛」。生産労働に欠かせない存在で、現在の軽トラックやトラクター・耕運機の役割を担っていました。牛はとても大切にされ、遠方に荷物を運ぶ時には、牛用の藁沓をつくり、足が痛まないようにはかせていました。

作画 小林佳繁



仰木の秋の風物詩といえは、吊し柿が連なる「柿屋」の風景です。渋柿がとれたら家族総出で柿剥きを行いました。仰木の吊し柿は有名で天津や京都に出荷していた頃もありました。残った皮は無駄にはせず漬物の味付けなどに使いました。また、渋柿が熟した「ずくし（じゅくし）」には、つたい粉（大麦を粉にしたもの）をまぶした「柿こね」や、渋を抜いた「さわし柿」も皆が好きなおやつでした。

作画 後藤美子

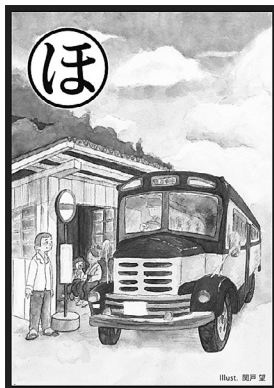


に
じゅうだん
二十段
柿屋に映えし
吊し柿



昭和四〇年代には江若鉄道のボンネットバスが走っていました。舗装のしていない細い砂利道をバスが走り去った後はひどい砂ぼこりでした。それまで堅田へ通学するには自転車か徒歩だったのでとても便利になりました。道路が整備されるきっかけとなりました。

作画 関戸望

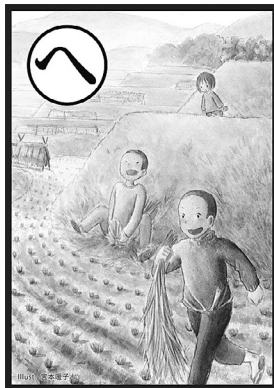


ほ
ボンネットバスが
走る
砂利道
砂ぼこり



棚田での土手すべりは、子供たちの人気の遊びでした。ソリの代わりにお尻にワラを敷いて滑りました。ワラは、家の牛小屋や稲木から勝手に取り、よく大人に怒られました。稲木を避けながら滑るのはスリルがあり夢中になりました。雪の日は、竹スキーをしたり、ハンゴやミカン箱でソリ遊びをしました。男の子も女の子もみんな一緒に遊びました。

作画 宮本暖子

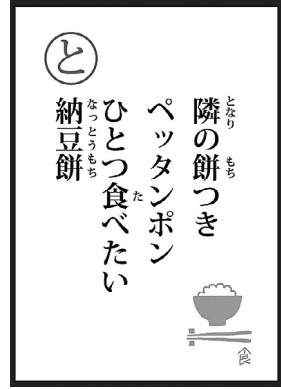
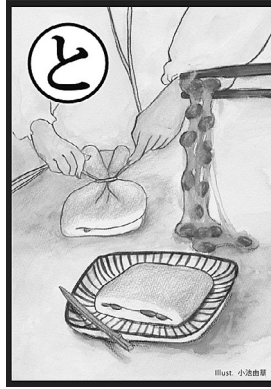


へ
へっぴり腰
藁をはさんで
土手すべり



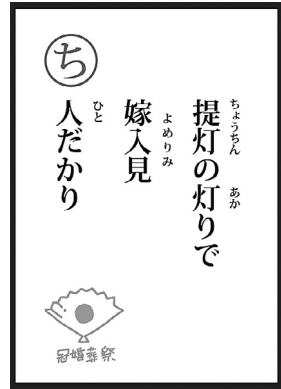
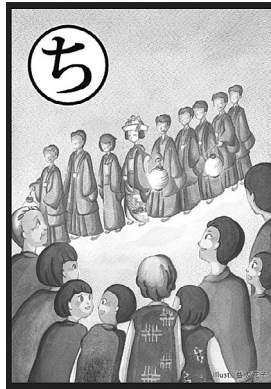
関西では納豆をあまり食べないといわれますが、仰木では男子が一人前として認められる儀式「スノウ」にて、納豆餅が食べられてきました。つきあがったお餅を大円にのびし塩味の納豆を挟んで、きなこをたっぷりまぶして、絵札のようにワラの茎を使って食べやすい大きさに切ります。近所で餅をつく音が聞こえると読み札のことはを節をつけて歌いました。仰木独自の食文化を伝える料理として今も大事に受け継がれています。

作画 小池由華



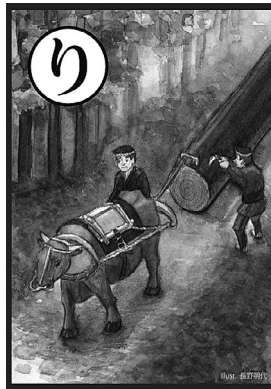
仰木の結婚式は新郎の自宅で三日間にわたって行われました。嫁入り行列は夜に行われ、提灯の灯りにももされた花嫁さんを目みようと人だかりができるほどでした。夜八時に花嫁が外にいと「八割れ」といって縁起が悪いため、行列は午後八時までか、八時以降に行うという風習がありました。

作画 益友花子

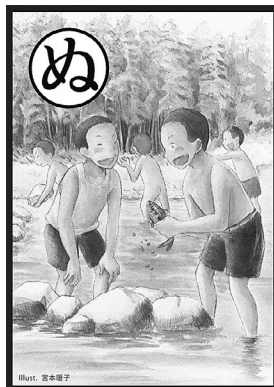


以前は仰木は林業が盛んで、山の木を売り生計をたてる家もありました。木を切り出すにはやはり牛の力が必要でした。六間(約十二メートル)の丸太を鞍につなぎ、牛に引かせて「シーチャイ」と牛に声をかけながら舵とブレーキを操作し、せまく曲がりくねった林道を下っていくのはとても技術がいりました。

作画 長野明代



コンクリート三面張りになる以前の天神川、大倉川、御呂戸川などは、男の子たちの格好の遊び場でした。川の中にある段差の部分で石やワラでせき止め、二人がかりで魚を^ど手に追ひ込み、魚が岩の陰に隠れる習性を利用してつかまえました。アユ、ハイ、ムツ、アンダラバイ（ヤマメ）などがとれました。釣りをすると、ナマズやウナギ、ドジョウなどがとれ、夕飯のおかずにもしました。

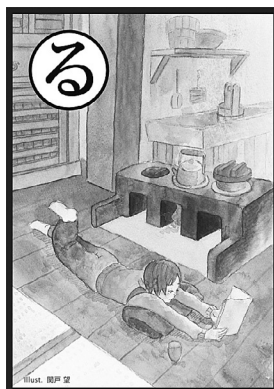


作画 宮本暖子

ぬるりと
魚つかみに
川を止め



土間と座敷の境にある小釜のおくとさんを「ひたき座」と言います。冬の夜は、家族で暖をとりながら^{わらわら}藁細工作業をしていました。青年たちが、気になる女の子がいる家の「ひたき座」に集まり、一緒にお茶を飲んだり藁仕事を手伝うなど、家族公認の交友が行われる憩いの場所でもありました。

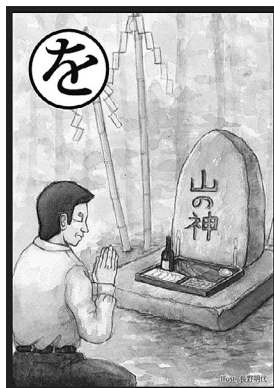


作画 関戸望

留守番を
ひたき座で暖とり
ウトウトと



仰木では九月十月に「山の神祭」が行われます。山の神は女の神様でとてもヤキモチ焼きのため、お供え物も自分より美しくないものを望み、仰木では牛の舌のような形の餅、鯛をかたどった木板、お神酒、お米などを供えます。祭の日に女性が山へ入ると神の怒りで山が荒れると伝わることから、仰木では奥さんのことを冗談で「うちの山の神は怖いで」と言います。



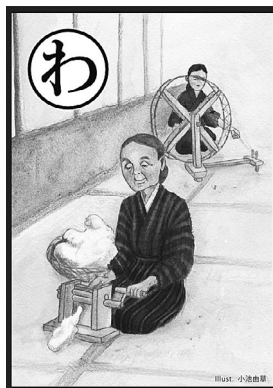
作画 長野明代

怒ると怖い山の神
女は一切
かまいません



仰木では以前はどの家でも木綿を栽培し、綿から糸を作っていました。子供たちも綿花摘みや綿繰り機を使って綿と種に分ける作業を手伝いました。綿と種は、その形から「雪」と「あられ」に例えられました。綿は、堅目の布団屋などの専門の職人に依頼をし、綿打ちを行って繊維をほぐし、自宅にて糸車をまわし、糸を紡ぎます。

作画 小池由華



わ

雪あられ

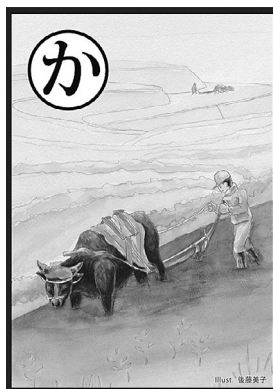
キユーと分けたる

綿繰り機



昭和三〇年代初めまで機械がなかったため、米づくりはすべて手作業で行われていました。田植え準備として、牛にカラスキを引かせて田んぼを起していました。泥田に足を取られる作業はとても力がいりました。一軒の家で複数の棚田を所有しており、田植え準備だけでもひと苦労でした。

作画 後藤美子



か

尻叩く

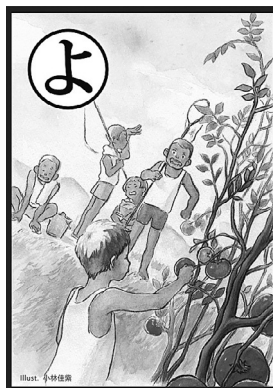
引っばる牛の

カラスキを



畑や野山には、季節を通して子供たちのおやつがたくさん実っていました。キウリ、トマト、ナス、マクワ、スイカ、ウメ、ビワ、ナツメ、クリ、ニッキ、カキ、イチジク、サクランボ、ナツハゼ、アケビ、イタドリ。よその畑にもぐりこんでこそり盗み食いしました。中には塩を持参して遊びに行くツワモノも。大人は、「しやうがないやつちや」と言って、見てみぬフリをしてくれました。

作画 小林佳紫



よ

盗み食い

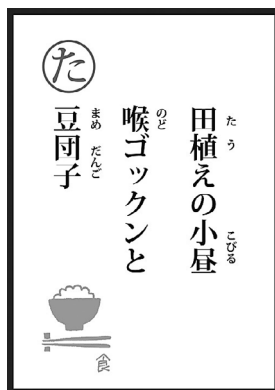
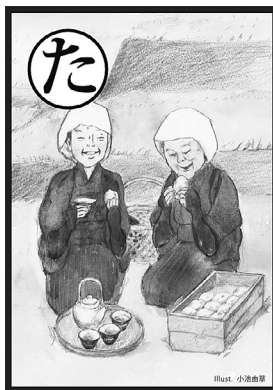
キウリやトマトを

よその畑で



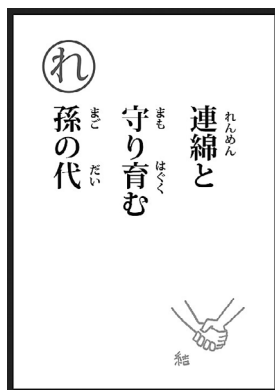
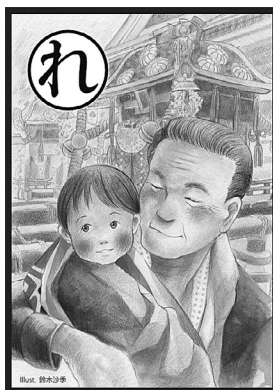
何枚も棚田を持つ家は、親類・近所に協力してもらい、結で田植えを行いました。「小屋（十時や十五時頃に食べる軽い食事）」の服には、「豆団子」を振る舞うのが習慣でした。豆団子は、だんご粉と水をよくこねて、塩味のエンドウ豆と混ぜ、お饅頭の形にし蒸し、お砂糖をまぶして食べます。とても美味しく、みんな休憩を心待ちに働きました。

作画 小池由華



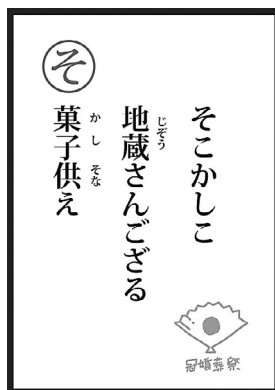
仰木を歩いている子供たちにおじいさんが「どこの子や?」と聞くと、子供たちは「佐七の子や」などと屋号で答えます。「そうか、ワシはそちのおじいさんと同級生や。氣いつけて帰リや」と屋号を聞くだけでその子の事が伝わります。子供たちは地域の皆で育て、見守る存在。代々、その大きな懐で育った子供たちが仰木を引き継いでいきます。

作画 鈴木沙季



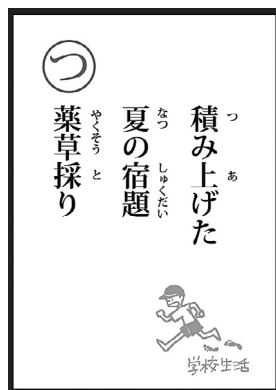
仰木の各家や辻々にはお地藏さまや野仏さまが祀られています。いつも季節のお花が手向けられ、地域を見守る存在です。八月三・二四日の地藏盆には飾り付けをし、お供え物をあげ、ヨダレカケを代えます。平尾、下仰木地区では祠をめぐりお参りする「地藏めぐり」が行われています。上仰木、南町や辻ヶ下地区は地藏堂に皆が集まり、音頭取りが生で唄う江州音頭の盆踊りを行います。

作画 益友花子



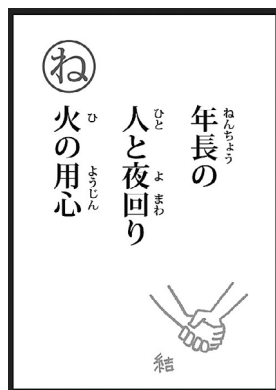
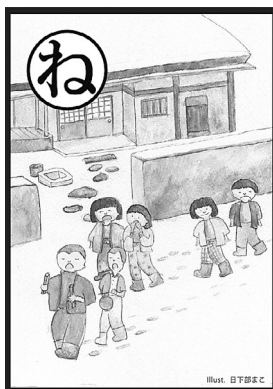
戦前・戦後の頃、小学校の夏休みの宿題に「薬草取り」がありました。薬草の種類はジュウヤク、ゲンノシヨウコ、ヨモギ、オオバコ。乾燥させて一人一貫(三・七五キロ)、家族みんなで手伝い、採集していました。始業式の日には体育館に天井につくほどの薬草が種類ごとに分けられうす高く積まれていました。薬草を持っていくと、先生が計ってくれて鉛筆と消しゴムをもらえました。

作画 宮本暖子



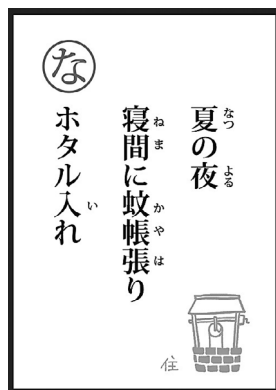
学校が冬休みの期間、子供たち四〜五人で年長さんを先頭に、「チヨンチヨン!」と拍子木を打ちながら、「火の用心!」「マッチ一本火事の元!」「餅焼いても家焼くな!」と叫びながら夜回りをしていました。

作画 日下部まこ



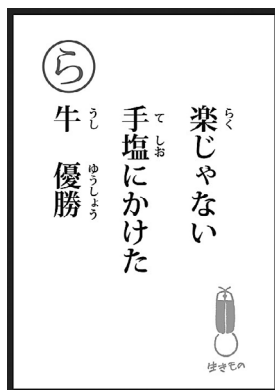
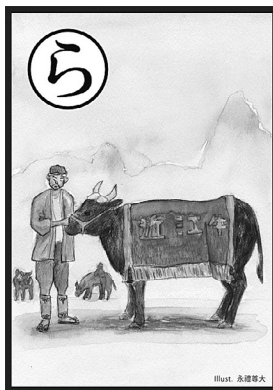
夏は蚊が多いため、蚊取り線香の代わりにスギの生皮などを燃やし、煙をたて家から虫を追いました。夜は、蚊よけのために蚊帳(天井から布団を取り囲むように釣った麻製の網目の布)を部屋に張りその中で寝ていました。蚊帳の中の閉ざされた小さな空間は、ホタルを放して楽しんだり、子供たちの夏の記憶に残っています。

作画 梅下菜々美



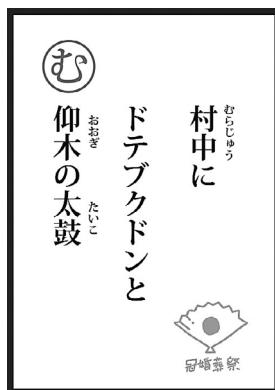
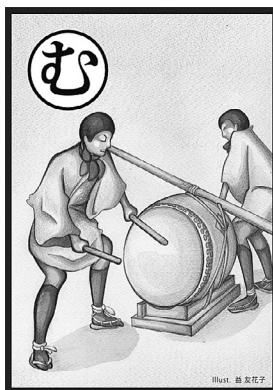
仰木では、牛の等級を決める品評会が行われていました。仰木小学校の運動場にたくさん牛が集まり、体格や毛並みなどを審査され位を決めていました。一級をとることは一家の誇りでした。牛の売買は馬喰が斡旋していました。仰木の牛は体格も良く、人に慣れていることから、京都三大祭の一つ「葵祭」や「時代祭」の牛車をひく牛としても重宝されていました。

作画 永禮尊大



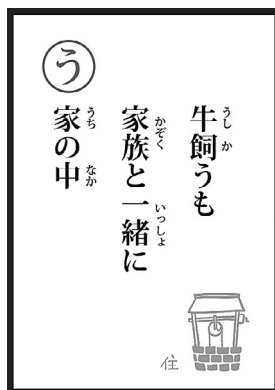
仰木祭の進行役として重要な役割を担う「仰木太鼓」。その音は遠く比叡山まで響く力強さだったそうです。昔は仰木祭の三日間しか太鼓を鳴らすことができなかったが、伝統文化を後世につなぐため昭和五十六年仰木太鼓保存会が結成され、小学生たちが毎週太鼓の練習に励んでいます。平成三年には大津市無形民俗文化財に指定されました。

作画 益友花子



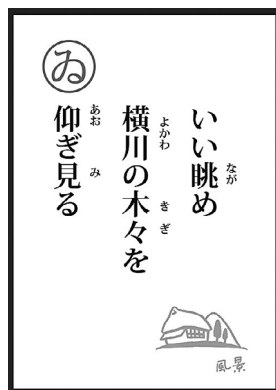
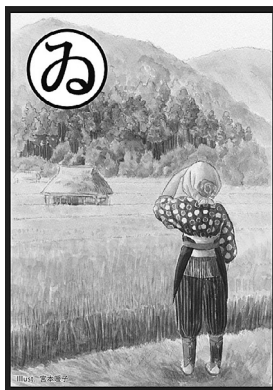
家の土間の一角に牛の部屋「うまや」がありました。牛は土間に向かって顔を出し、一緒に食事をし、お正月はお雑煮を食べさせるほど家族の一員でした。子供たちは毎日、学校の行き帰りなどにエサ用の草刈りやエサづくりなど、牛のお世話を手伝いました。

作画 関戸 望



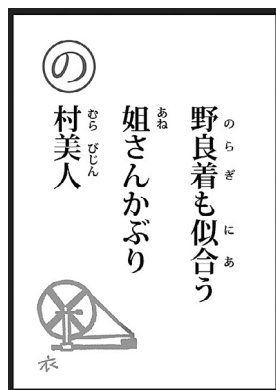
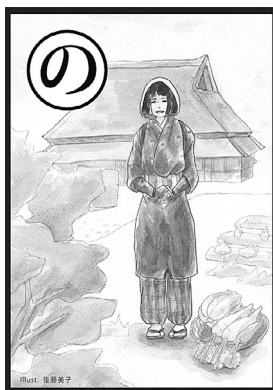
仰木の地名の語源は、比叡山延暦寺横川の原生林を仰ぎみる村Ⅱ「あおぎ」と言い伝わります。仰木は延暦寺領地の時期もあり、恵心僧都源信をはじめ高僧が建立した寺院が7つあります。また、延暦寺の造営に使用する釘などの鉄が造られたと言われるタタラバ遺跡が発掘されるなど、延暦寺の強い影響を受けていることが分かります。

作画 宮本暖子



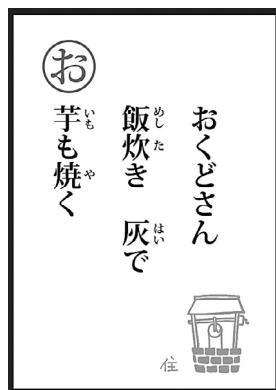
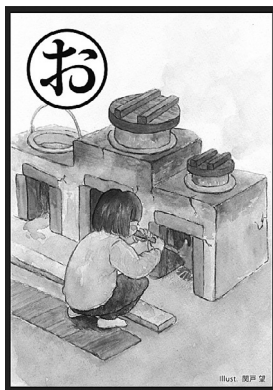
仰木の女性は良く働くと有名でした。「姐さんかぶり」は、日よけのために顔を半分隠す女性特有の手ぬぐいのかぶり方です。田畑や山での仕事着である野良着でも、色やシマ模様を組み合わせや前垂れ帯の色、草履の鼻緒に着物を組み込んだりと、工夫をしてオシャレを楽しんでいました。

作画 後藤美子



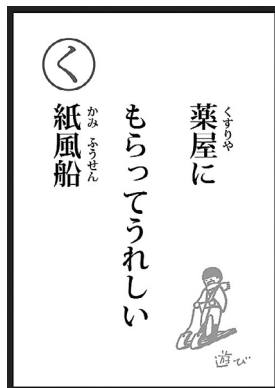
土間のカマド（おくどさん）は、竈が三、五つ並んでいました。大鍋、御飯や汁用鍋、湯沸し鍋、牛の工サをつくる鍋。大鍋には火の神である三宝荒神を祀る家が多く、「三宝さん」と呼ばれ親しまれていました。薪やワラ、モミガラで火をおこしました。おくどさんで炊いたご飯のおこげ、灰で焼いたイモやクリなどの味が忘れられません。

作画 関戸望



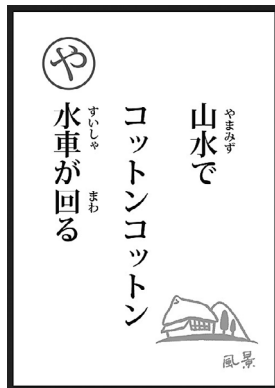
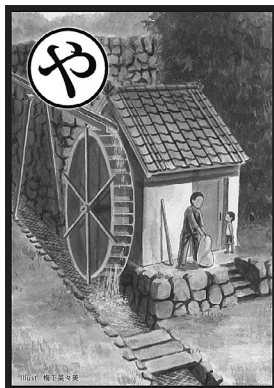
仰木には富山と甲賀の葉売りが出入りして
いました。お葉のセットを家に預け、一年後
に使用した分のみ代金を支払う仕組みになっ
ていました。仰木ではお米などの物々交換で
支払う家もありました。一年に一度、葉売り
からもらう紙風船を子供たちは心待ちにして
いました。

作画 梅下菜々美



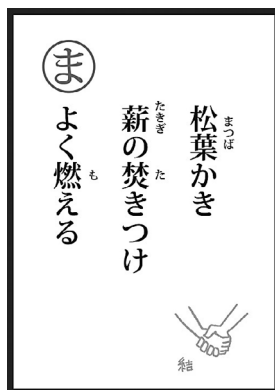
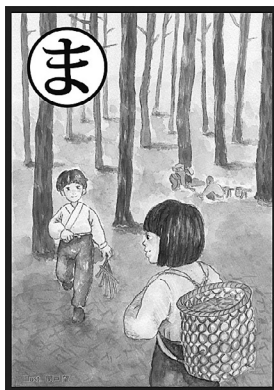
水車小屋の中に石臼いろうすがあり、玄米を白米に
する精米や製粉をしていました。川辺の水車
では洗濯や野菜を洗ったりもしていました。
水車は共同利用で、時間を決めて使用して
いました。上仰木には急斜面を利用して、約
一〇台の水車が連なり壮観でした。

作画 梅下菜々美



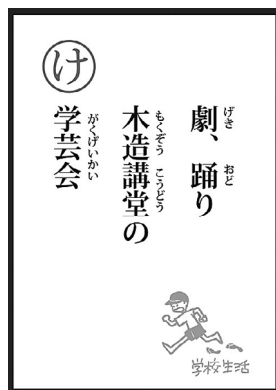
米や松茸など秋の収穫が終ると、一年分の
燃料集めに柴刈り(柴仕)が始まります。
十五人ほどの組で行かない、小学校高学年も土
日曜はこれに加わっていました。集めた薪、
松葉、コナハ(落ち葉)などは、玄関前に積
んだり、家の屋根裏(ツシ)にあけて乾燥さ
せ保管していました。青年団は、柴を堅田へ
売りに行き、そのお金で映画を見に行きました。

作画 関戸 望



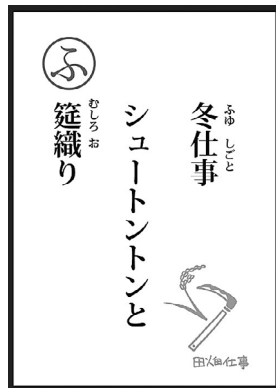
学校で一番大きかった建物が講堂でした。子供たちの集会、各種の発表会など、近隣の学校が集まって合同音楽会もよく開きました。また地域の青年団が芝居を行いました。脚本作りや舞台・小道具づくりまで行ない、衣装・かつら・刀なども京都の太秦撮影所まで借りに行き、本職に負けないほど上手く、講堂いっぱい人が集まり、夢中になって鑑賞しました。

作画 兼森絢子・日下部まこ



絵札の絵は依^よ編^ひみの様子です。筵^じ織^りは良い収入源でした。ワラを打ち縄を作り、筵織り機を使い、手際よく進めば一日六〜七枚織れました。その後、竹ボウキで表面をこすり滑らかにしました。農協で検査し、合格すれば、昭和三五年頃は一枚二〇円で買われ、農協で販売されました。

作画 鈴木沙季



五右衛門風呂は大きな鉄金の上に湯桶を取り付け、底板を浮き蓋とし、その板を踏み沈めて入浴します。焚口は洗い場の横にありました。桶と金のすきまには布をつめて水漏れを防止していました。お風呂は週二回ほど沸かし、それ以外は隣家へ、追い炊き用のワラを持って「もらい風呂」に行きました。もらい風呂で二日十六人が入ったこともありました。

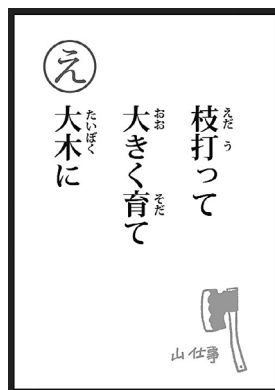
作画 日下部まこ



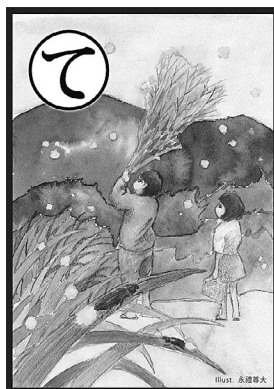
仰木の山は「惣山」という村の共有林が多く、村全体の財産として守ってきました。二つの生産森林組合（上仰木・辻ヶ下生産森林組合／平尾・下仰木の逢坂山生産森林組合）では、年三回「山行き」が行われ、各戸一各戸必ず参加をし、村総出の森林整備作業として、踏査、枝打ち・間伐などを行います。「枝打ち」は植林した杉が節がなくなまっすくな木に育つように、要らない枝を払い落す作業です。



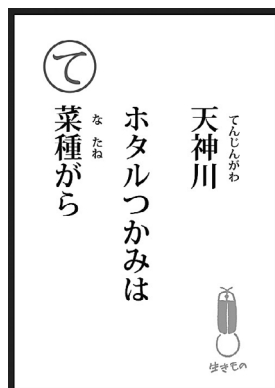
作画 長野明代



初夏六月下旬頃、仰木の田んぼの水路や川にはゲンジボタルが乱舞します。カエルの鳴き声が響く中、大人は夕涼みに、子供たちはホタルつかみに行きました。菜種の種をとった後の茎（ナタネガラ）を束ねて網代わりにして、ホタルをつかまえました。仰木にはヘイケボタルや竹林などにヒメボタルが生息しています。



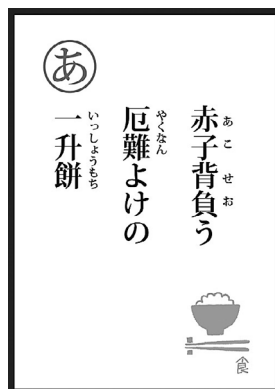
作画 永禮尊大



一歳の誕生日を迎えた子に一升の餅、またはうるち米を背負わせる風習です。「一食べるのに困らない」という願いを込めて現在も行われています。「餅」は、正月の鏡餅、災いを払うための棟上げや神社での餅まきなど、伝統行事によく使われます。

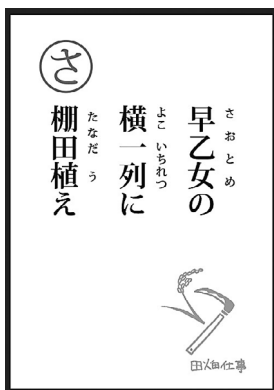
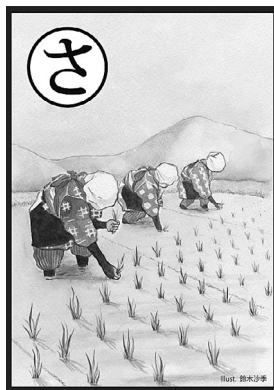


作画 小池由華



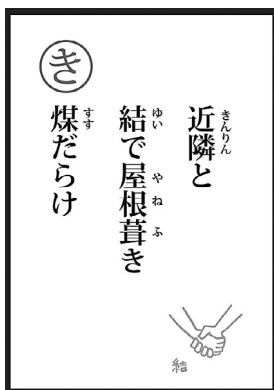
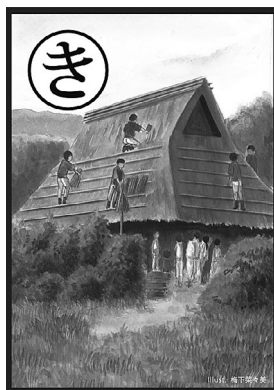
小さな棚田が何枚もある仰木では、家族や近所で助け合って田植えを行ないました。苗を植える時は一列に並び、後ろにさがりながら、一人で幅約一五〇センチに一升マス（約十五センチ）の間隔で植えました。田植えが上手な早乙女は雄琴や堅田へ田植えのアルパイトと呼ばれました。かすりの着物に、ハンテン、カルサン（短いもんぺ）、赤タスキ、ハバキ、テツツ（手筒）、イタカサが早乙女の格好でした。

作画 鈴木沙季



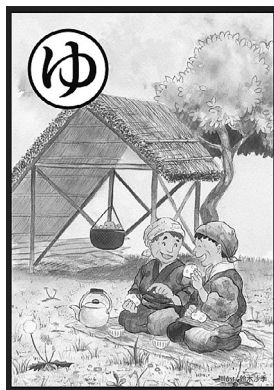
仰木では麦藁わらやカヤ葺き屋根が多く、屋根の葺き替えには近所が集まり協働しました。材料が当家で足りない時は近所に借り、またその家の葺き替えの時は材料で返すように、仕事も材料も持ちつ持たれつで補い合う「結」の精神で、地域の共同体が作られていました。仰木では二毛作の裏作で麦をつくっていました。小麦は粉にして、うどんやパンにしていました。

作画 梅下菜々美



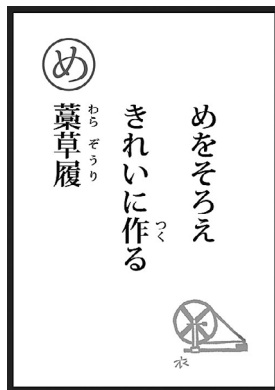
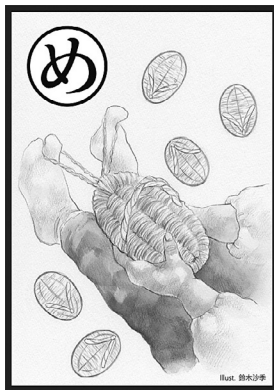
田んぼにはいたる所に藁葺きわらぎの「ユオ（野小屋）」が作られていました。ハンモックなどを吊るしたり、赤ん坊をワラのフゴに入れ吊り下げるなどいづく場、昼寝の場所、荷物置場にもなりました。暑さや雨も防ぐことができ、農作業には不可欠な場所でした。

作画 鈴木沙季



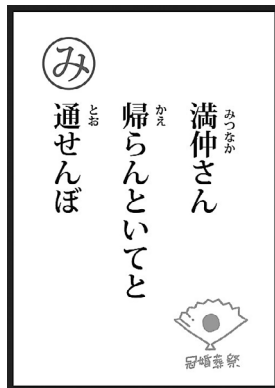
昭和二五年頃にゴム草履やスックが普及して
くるまでゲタや藁草履をはいていた。藁
草履は雨の日は一日で、晴れでも約七、十
日間でかかとや鼻緒が消耗するので大量に必
要になりました。そのため昔は一人一〇〇足
以上作っていました。今では仰木祭の神輿か
きや祭事役がはく草履を老人クラブの皆さん
が手づくりしています。

作画 鈴木沙季



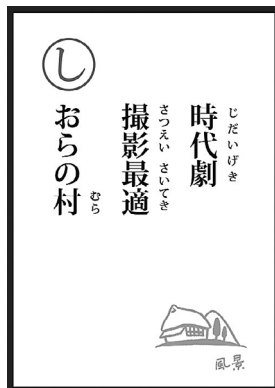
古式儀礼が残る小椋神社の春の例祭「仰
木祭」(通称…泥田祭)を始めたとき、仰
木を語る上ではすせない源満仲、天台宗に
帰依し仰木に一〇年間滞在したと伝わって
います。故郷の摂津多田に帰る時に、別れを惜
しんだ村人が馬を止めたとわれ、その様子
が仰木祭の儀式「駒止めの儀式」となってい
ます。

作画 益友花子



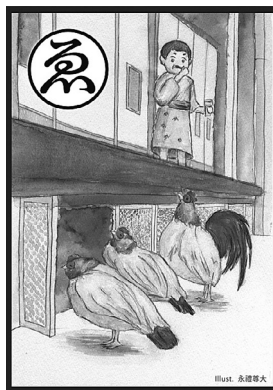
仰木では、東映や大映などの時代劇のロケ
がたびたび行われていました。古い映画には
小椋神社、杉谷、落合、天社門などが登場
します。大川橋蔵、大川恵子、美空ひばり、
中村錦之助、片岡千恵蔵、若山富三郎、丘さ
とみなど有名な俳優を一目見ようと皆が集ま
り熱狂しました。

作画 小林佳菜



多くの家が縁の下にニワトリを飼っていた。一日一回放し飼いをし、エサをやるのは子供の役目でした。早朝のコケコッコの鳴き声が目覚ましになっていました。祭やお正月などの寄り合いの時にはニワトリを絞めて、「かしわのすき焼き」を食べるのが仰木の定番です。

作画 永禮尊大



えん

縁の下

にわとり朝から

コケコッコ



明治六年に開校した仰木小学校。昭和四八年頃に新校舎に改築されるまではよろい張りの木造校舎でした。ワラや竹の皮に古い布を編み込んだ草履の上履き、運動場にあつた大きな土俵、火鉢で温めたお弁当、用務員さんのベルの音、真野浜の水泳、二宮金次郎像への毎朝の一礼など懐かしい思い出ばかりです。平成二五年に開学一四〇周年を迎えました。馬場の校の下を通学する元気な仰木の子供たちの姿は今も変わりません。

作画 宮本暖子



ひ

ひやうねん
百年を経る

木造校舎の

あたたかみ



昔は、着物は全て手作りでした。木綿糸をつくり「機」を織り、布にしていました。一家に娘が生まれると嫁入りに持たせるため、反物や野良着、前垂れ、足袋、布団など冬・夏用それぞれの分を、嫁ぎ先で困らないように、母親たちは夜なべをして準備をしました。

作画 小池由華



も

もめん
木綿糸

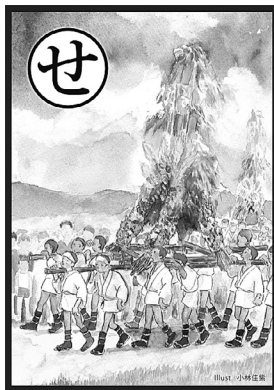
シュータンタンと

機を織る



八月一四・一五、下仰木の八坂神社にて牛の厄病除けの祭事である笹神輿の巡行が行われます。「笹神輿保存会」により昭和五〇年頃に復活しました。現在笹神輿は一基ですが、以前は大中小の三基があり、青年団に入る前の一五〜一八歳の「前髪」と呼ばれる組織が執り行っていました。準備・運営を通して上級生から礼儀や遊びなどさまざまなことを学びました。

作画 小林佳紫

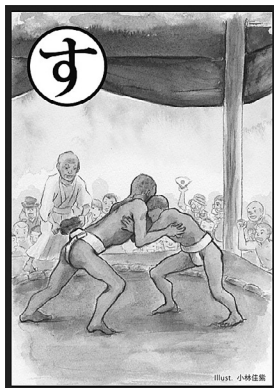


せんばい
先輩に
て
手ほどき受けて
う
ささき
みこし
笹神輿



仰木の人は相撲が好きで、農作業で鍛えているため強く、有名になった人達もいました。小学校の校庭には、四本柱を建てたやぐらの相撲場が築かれており、子ども達もよく練習していました。下仰木の豊岡稲荷神社の例祭などで、近隣の村から大勢の青年が参加する盛大な奉納相撲大会が催されました。村をあげて応援し、楽しいふれあいの場になっていました。

作画 小林佳紫

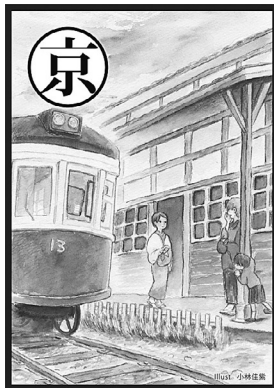


すもう
と
相撲取り
おとな
こ
大人も子どもも
しこ
ふ
四股を踏む



娘は、中学を卒業すると約二年間、京都へ住み込みで奉公に行きました。旅館や医院、呉服屋、菓子屋などで掃除洗濯、子守りなどの仕事のかたわら、華道を習ったり、調理師免状をもらったり手助けをしてもらい、休日はお小遣いをもらい遊びに行くなど、一人前の女性として嫁入り修業に励みました。

作画 小林佳紫



きょうぼこう
京奉公
よめい
しゅぎょう
嫁入り修行
あかぬ
垢抜けて



四二一 完成記者発表

四月二三日に完成記者発表を行った。出席者は、木村所長をはじめ研究員の永江、大原、加藤と学生スタッフ十二名のうち五名、加えて研究活動期間の二〇一一年、一二年に仰木学区老人クラブ連合会長を務められていた飯田昌孝さん、飛田幸男さんにご出席いただいた。(写真25・27)



写真25：完成記者発表のテレビ取材



写真27：完成記者発表でカルタの絵について具体的に説明する学生スタッフ



写真26：完成記者発表で取材に応える研究活動当時の老人クラブ会長のお二人

以下、放映された番組、および掲載された新聞である。

・《びわ湖放送》きらりん滋賀 17:50～18:10

・《NHK》おうみ発610 18:10～19:00 ほか2回放映

・《ZTV滋賀放送局》「おうみ!かわら版(滋賀)」(15分)、「Weekly!かわら版(滋賀)」(30分)

・2013年4月24日(水) 朝日新聞「山里の暮らしを描いたカルタです」

・2013年4月25日(木) 産経新聞「郷土の魅力かるたに」

・2013年5月1日(水) 京都新聞「仰木の魅力カルタに」

・2013年5月4日(土) 読売新聞「農村の暮らし集めていろは歌」

・2013年5月23日(木) 中日新聞「かるたで伝える昭和の仰木」

・2013年6月14日(金) 読売新聞しが県民情報「仰木の風土カルタに」

四二三 ご協力いただいたみなさんに謹呈

聞き取り調査にご協力いただいた仰木学区老人クラブ連合会の五七名のみなさん、取材に協力いただいた仰木小学校などへ、お礼の気持ちを込めて謹呈した。「宝ものやなあ」と大変喜んでいただいた。また、近隣の学校などに活用していただくため配布した。各方面からの反響、活用、増刷などについては、後編で報告する。

中編の結び

本稿は、中編としてひとまずここで終える。前編、中編を通して、学生たちが地域と深く関わり、聞き取り調査からカルタ制作までをチームとして担うという形の研究手法について手順に沿って詳細に報告した。後編では、本研究を通して学生や地域の方々にどのような変化があったか、教育的、啓発的な側面を考察してみたい。また、成果物である「仰木ふるさとカルタ」の活用を通して、「ふるさとカルタ」の意義を改めて考えたいと思っている。

謝 辞

本学近江学研究所研究員の大原歩と加藤賢治が、本研究の共同研究者である。大原歩は、学生の頃より仰木をフィールドとした「地蔵プロジェクト」という研究チームで活動し、仰木公民館に務めていた経験もあり、本研究において大学と仰木をつなぐ役割を担っていただいた。学生への指導、研究活動のサポート、研究の記録（録音、撮影）等、本研究を推進する上で欠かせない存在であった。加藤賢治は、「仰木・堅田の祭礼」を研究してこられ、特に上仰木での調査に多大なご助力をいただいた。また、仰木在住のたくさんの方々のご協力をいただき、本研究の取り組みはあり得ない。聞き取り調査にご出席いただいた

仰木学区老人クラブ連合会の方々、わら草履づくりや納豆餅、手づくり味噌などをご指導いただいた方々、読み札と一緒に推敲してくださった仰木の俳句の会「畦草会」の方々など、総勢五十名以上に及ぶ方々が学生と温かく接してくださり、多大なご協力をいただいた。他にも一八五通のアンケートを記入してくださった方々や仰木で出会った多くの方々に、ふるさとカルタへの期待と励ましの応援をたくさんいただいた。ここに感謝の意を表する。

調査・制作協力

仰木学区老人クラブ連合会、俳句の会「畦草会」、
仰木学区自治連合会、大津市立仰木小学校、
大津市立仰木市民センター、仰木ふれあい夏祭り実行委員会

学生スタッフ（敬称略）

梅下菜々美、益友花子、兼森絢子、日下部まこ、小池由華、後藤美子、小林佳紫、鈴木沙季、関戸望、長野明代、永禮尊大、宮本暖子 以上12名が学生スタッフとして研究を支えた。あわせて、感謝の意を表する。

成安造形大学附属近江学研究所紀要 第4号

発行日 平成27年3月23日

発 行 学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属近江学研究所
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話 077-574-2118

発行者 木村 至宏

編 集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2015

ISSN 2186-6937